

正蓮寺報

令和八年六月一日
第二三九号

ご案内

夏参り



七月五日(日)

朝座 十時

昼座 一時半

お昼 お斎進上

法話 吉岡 妙由 先生

奈良県 龍泉寺

テーマ 「人生の点検」

九時半 永代合葬墓勤行

一時 納骨堂勤行

三時半 世話人会

はやいもので、令和八年も半年が過ぎようとしています。みなさま健やかにお過ごしでしょうか。

今回の『正蓮寺報』は、七月の「夏参り」と八月の「盂蘭盆会・心のふるさとコンサート」等、正蓮寺の夏の諸行事のご案内です。どうぞ皆さまお誘い合わせのうえ、お参りください。皆さまにお目にかかれるのを楽しみにしております。

さて、先日朝刊折込広告の中に、某葬儀社の「お別れ火葬式プラン」というものがありました。通夜や告別式などの宗教儀式は行わず、近い身内だけでお別れをして火葬を行う、いわゆる「直葬」です。

ご家庭の事情や故人の希望など、それぞれに理由はあることでしょう。しかし、お葬式とは、単に亡くなられた方を火葬し、お見送りするだけの場なのでしょうか。

つい十数年前まで、お葬式は、家族や親族、地域の人々がともに力を合わせて営むものでした。近所の方々が手伝いに来られ、多くの方が会葬し、亡き人を偲びながら悲しみを分かち合う姿が見られました。

しかし近年は、会館でのパッケージ化された葬儀が増え、「必要なサービスを購入するもの」へと変化しました。人と人とのつながりの中で営まれていたお葬式が、「家族だけで負担するもの」になってきているのです。

「タイパ(タイムパフォーマンス)」「コスパ(コストパフォーマンス)」という言葉に象徴されるように、現代は、何事にも効率や簡潔さが求められる時代です。このような時代の風潮の中で、人と人とのつながりや、悲しみを分かち合う時間までもが失われつつあるように感じます。

しかし、本来、「死」や「悲しみを分かち合う時間」、「人とのつながり」というものは「効率化」できるものではないはずです。

大切な人を亡くした時、人は、自分が多くの支えやご縁の中で生かされてきたことに気付かされます。お葬式の中で久しぶりに顔を合わせたご親族やご友人同士で、「あの時、あんなことがあった」「厳しい人だったけれど、優しかった」などと故人を偲ぶ中で、自分自身が、多くの人とのつながりの中で生かされていることに、あらためて気付かされるのです。立ち止まり、静かに思いを巡らせる時間があるからこそ、人は少しづつ悲しみを受け止め、自分自身の生き方を見つめ直していけるのではないのでしょうか。

浄土真宗のお葬式は、単に亡き人を送り出すだけの儀式ではありません。亡き人との別れを通して、自分自身の人生を静かに見つめ直す場でもあるのです。僧侶の読経や法話もまた、ただ儀式を進めるためのものではありません。悲しみの中で立ち尽くす私たちに、「いのち」や「生きること」の意味、そして「これからの人生、何を大切にしながら歩んでいくのか」を問いかけていくのです。

亡き人の死を通して、遺された私たち自身が、生きる意味をあらためて聞かせていただく。それが、浄土真宗のお葬式の大切な意味なのです。

大切な人との別れは、一人だけで抱えきれられるものではありません。ご親族やご友人、地域の人々とともに手を合わせ、その悲しみを分かち合い、受け止める時間が必要です。私も僧侶は、そのような時間に寄り添い、「いのち」や「生きること」の意味を、ともに考え続ける存在でありたいと思っています。

お葬式とは何か。そのあり方を、いま一度、ともに考えてみませんか。